



ありし日の稲葉文枝博士

### 追悼：稲葉文枝先生

稲葉文枝先生が平成13年10月22日、90歳の生涯を閉じられた。晩年の約二年半は自宅近くの病院で寝たきりの生活をすごされたため、覚悟はしていたものの、いざもういらっしゃらないと思うと、寂寥感、喪失感は一とおである。先生が突然脳梗塞で倒れられたのは、奈良女子大学創立90周年記念行事を翌日に控えた平成11年5月14日の夜であった。教育、研究、管理運営に大きな足跡を残され、教え子に慕われ、同僚の崇敬を集めておられたにもかかわらず、人前に出て晴れがましい扱いを受けることを極度に嫌がられていた稲葉先生らしいと、非礼な思いに耽ってしまった。

稲葉先生は明治44年7月15日大阪に生まれ、大手前高等女学校を経て、昭和4年奈良女子高等師範学校に進まれた。当時、奈良女高師（現奈良女子大学）は、東京女高師（現お茶の水女子大学）と並んで女子の最高学府であった。帝国大学が（東北帝大を例外として）女子に門戸を閉ざしていた時代である。研究への情熱に燃えていた先生は、卒業後、広島文理科大学（現広島大学）に進まれ、ヒドロゾアの研究者であり昭和天皇の研究上の相談役でもあった川村多実二教授のもとで、カキの研究をされた（因みに川村多実二教授の実子である川村徹氏は、奈良女子大学の物理学科教授で、学長も務められた）。広島での3年間の研究のあと、昭和11年、京都帝国大学（現京都大学）で、駒井卓教授のもと、嘱託研究員としてコマユバチの遺伝学の研究に没頭された。日本が自己肥大妄想に駆られて戦争への道を歩んでいた頃である（筆者は生まれてもいなかった）。コマユバチの研究は、5編の論文とし

て逐次発表されている。

昭和17年4月、母校の奈良女高師に常勤講師として迎えられ、敗戦直前の昭和20年8月3日に、34歳の若さで教授に昇進された。当時の日本では国立機関の女性教授は極めてまれであった。昭和24年の新制大学への移行後は、奈良女子大学教授として激動期の大学運営に尽力され、昭和38年には評議員に、昭和46年には国立大学で初めての女性理学部長に選出された。昭和50年に定年退官され名誉教授になり、昭和58年には勲三等宝冠賞を授与された。

奈良女子大学時代の稲葉先生の研究テーマは、繊毛虫（ゾウリムシ、ブレファリズマ、ウロスティラなど）の電子顕微鏡を使った細胞遺伝学的研究であった。電顕そのものは戦前にすでに国産品ができていて、昭和23年には日本電子顕微鏡学会が創設されていた。しかし超薄切片を必要とする生物試料に電顕を活用できるようになったのは昭和25年頃からだと言われる。稲葉先生はこの新しい分野の台頭に注目された。昭和29年には、同僚の重永道夫教授とともに奔走され、同窓会（佐保会）の支援を受けて奈良女子大学にも電顕が導入された。小規模地方大学へのこのような大型機器の早期の導入は、その後奈良女子大学が、動植物細胞の電子顕微鏡学的研究での日本における中心機関の一つとなる快挙であった。電顕導入に先立ち、稲葉先生の教え子で、昭和28年には阪大微研の副手として超薄切片の作成に腕を振っていた菅沼美子氏（のち奈良佐保女学院短期大学学長）と共同研究を開始し、昭和34には講師（非常勤）として奈良に迎え本格的な研究が始まった。電顕で微細構造を見ることが自体が初めての報告になるという状況が長らく続いたため、稲葉研から発信された見事な電顕写真は枚挙に暇がない。その中でも、ゾウリムシの接合中に今まさに移動核が接合面を通過中という瞬間をとらえた電顕写真の掲載論文（Proc. Japan Acad., 42, 394-398, 1966）は記念碑的な業績である。稲葉先生は日本原生動物学会の設立当時からの会員で、昭和48年には大会委員長として第7回大会を奈良女子大学で開催しておられる。

私事になるが、昭和40年代のはじめに、奈良女子大学の稲葉研と京大の三宅章雄講師（現イタリア・カメリノ大学教授）の研究室との間で、交互に研究室を訪問しながらの定期ゼミを開いていた。この交流が契機となって、稲葉研からいただいたブレファリズマを材料に、三宅先生がガモンの分離精製を果たされたのであった。当時の稲葉先生は、野暮天の男子院生から見て、厳しく、堅苦しく、頑固な人という印象であった。のちに、稲葉先生をより深く知るようになって、以前の私の印象は、先生の礼儀正しく、高い倫理観を持った、研究への自負心の強い凛とした性格を見誤っていたものであることを納得した。それどころか、現実の先生は、些事にこだわらないユーモアにあふれた方であることを知り、私の人物識別眼の至らなさを恥じ入った次第である。たとえば大学正門横にあった奉安殿（戦時中、陛下のご真影を納めた石造りの堅牢な建物）を、戦後マイクローム室代わりに使われたり、「イナバー」と呼ばれるサロンを開いておられたり、「やみなべ会」という名の忘年会を続けておられたり、卒業生が「稲葉先生を囲む会」をつくってそれが現在も続いているなど、先生のお人柄をしのばせる事例がたくさんある。

その私が、稲葉先生の定年退官と入れ替わりに昭和50年に奈良女子大学に助教授として赴任し、稲葉先生が担当しておられた「遺伝学」「同実習」「動物分類学」「同実習」を引き継ぐことになった。無免許運転同様の動物分類学の担当と聞いて当初は恨めしい思いをしたが、ねじり鉢巻の勉強を余儀なくさせられたことが私にとって思いがけない知の資産となったように思われる。その後27年目の稲葉先生の告別式の当日、かつて先生が座られた理学部長の席から、先生のご冥福を祈り教授会メンバーとともに黙祷を捧げることになるとは夢にも思わなかった。それはちょうど、告別式の後の、まさに先生が茶毘に付されようかという時刻であった。

（追記：本文を記すに際して、稲葉先生の教え子であり、稲葉先生の二年半の入院生活中、実子のようにお世話をされた池口信子氏から、先生の履歴等について多くのご教示を頂いた。心よりお礼を申し上げます。）

（奈良女子大学理学部教授 高木由臣）